

清洲城懷古（榛葉竹庭）

敵を臨んで 杯酌を飛ばし

鞭を揚げて 陣頭に立つ

力は能く 桶狭を穿ち

名は忽ち 蜻洲に満つ

像は凜として 櫻花謝し

碑は蕭として 草葉稠し

壯氣を尋ぬるに 由無く

只見る 一川の流るるを

臨敵飛杯酌 揚鞭立陣頭
力能穿桶狭 名忽滿蜻洲
像凜櫻花謝 碑蕭草葉稠
無由尋壯氣 只見一川流

解説 清洲城は一四〇五年、尾張守護職斯波義重が築き、後に織田氏の居城となった。一五五五年、信長が城主となるや城郭を大々的に整備し、続いて桶狭間に今川義元を破つてその威力を示すと共に、遂には天下に覇を唱えるに至つた。然し、信長が本能寺に残して後は、城主もめまぐるしく交代し、一、六〇九年、徳川家康が名古屋城を築くに及んで廢城となつた。

語釈 ※杯酌さかずき 杯ひしやくと柄杓。 ※陣頭 軍の先頭。 ※桶狭 桶狭間。 ※蜻洲 日本。 天下。

通釈 解説 敵を目前にしながらも悠然と酒を酌み交わしていた信長は、高々と鞭を挙げ陣頭に立つて今川の本陣へと向かつた。力はよく桶狭間を突き破り名は忽ち忽ち天下に鳴り響いた。已に桜花は散つて信長の銅像が凜々しく峙ち、草は茂つて碑石が物寂しげに見える。嘗ての壯氣に接するすべも無く、ただ一川の流れるのを見るのみである。